

赤道直下の岩峰 Mt. Kenya

永 目 伊知郎

ナイロビから車で4時間程で(実際には、Mt. Kenyaの表玄関であるNaro Moru Liver Lodgeにてチェックインし、ザック、シュラフ等を借り、ロッジのジープでガイドとポーターをピックアップしながらゲートへ向います)、国立公園のゲート2,400 mに到着です。

この登山はガイドとポーター(各々1人)をつけてのパッケージになっておりFull-boardの食事込みで申し込みます。2泊3日で2,130 ksh(約15,000円)。単独登山は禁止されており、今回は私と家内を含め5人のメンバーです。[N氏および、O氏(大使館)、N夫人(ジョモ・ケニアッタ農工大)]。

一般に10月は乾季に当たり登山向きのシーズンなのですが、今年は雨が多く公園ゲートから約8 kmの林道はその保護の為に、Closeされておりました。と言っても私の日本での経験からすると閉めるような状態とは思えません。単にそう言われているから閉めている、というところでしょうか。Closeとは知らずゲートに着くと、ドライバーが「大きな車に乗り換えるので一度車を下りてくれ」と言うので言われるままにしました。すでに乗って来たジープは引き返す方向に向いていました。つまりこの8 kmの林道を歩いて最初のキャンプ地・Met Station(3,000 m)へ到着です。本当にぬかるみと水牛のフンをよけながらの車道歩きは頭にもきますし、倍疲れます。これは全く予想外の行程で、この距離(帰り)が3日目の頂上アタックを断念する大きな誘因となりました。早朝ナイロビ出発で、ここに夕刻の6時着です。車の場合は普通で2~3時着でしょう。

早速ガイドとポーターが夕食の準備です。すでに暗くなりはじめた周辺の森林地帯にはバッファローがうようよ、また、その落し物がいたる所にベタツとしています。(牛のそれと比べ水分が多く灰色で、径30 cmはあります。)シキーズモンキーという白いえり巻ザルもいます。

ランプを点し、小屋の二段ベッドにシュラフを準備し、ウィンドブレーカーを着ての夕食です。トリ肉と野菜のごった煮、パン、スープ等、デザートはパイナップルとなかなかしゃれています。ラジオJapanが良く聞こえどこかの民謡がこの雰囲気チグハグでした。念の為全員アルコールはひかえました。8時30分には寝袋へ。この日は本当に程良く眠れました。3,000 mですからここはまだ日本の北アルプスと

NAGAME, Ichiro : Mt. Kenya, Rocky Mountain Right on the Equator
ケニア大使館

同じです。

さて翌日は6時30分に起床。この日は4,300mのマッキンダースキャンプまでのだらだらの登りです。朝食はパン、メイズスープ、スクランブルエッグ、紅茶です。まずくてほとんどのメンバーが大半残し、各自持参のクッキーなどで済ませました。7時30分には出発。各自は両具、非常食、水、カメラ等のサブリュック(5~6Kg)ですが、N氏はビデオカメラをかかえているので大変です。けれどもお陰でとても良い記録フィルムが残りました。足は湿地が多いということもあり最低軽登山靴とショートスパッツが望まれます。

ポーター達は15kg程度のザックですが、かなりのスピードで登って行ってしまいます。小生がトップ、家内がラストのほぼ一列です。約1時間程で森林が少なくなり、3,400mの湿地帯に登りつめると、山麓のすそ野にまさにアフリカの大地が広がっていました。秋風の吹く高原のゆるい尾根をポールを目標に登り、ピクニック・ロックへ到着です。この頃から少しガスが出てきましたが大したこともなさそうです。ここからは左の溪谷(Teleki valley)を見ながらの横はみ歩きです。この辺りスゲ類が多く、水たまりをよけ、いく筋にもなっているぬかるむ道を選びながらの山行です。途中、各自持参のアメやクッキー、お茶などで腹ごしらえをし、40~50分に1度休みながらの歩きです。この日の行程は距離はありますがハイキングのような感じ(ただし足場は悪い)。

4,300mのマッキンダースキャンプには2時着でした。リスを大きくしたような、耳なしウサギのようなロッキーハイラックスがたくさんいます。辺りはジャイアントロベリアとジャイアントセネシオで、まるでキャベツ畑とサボテン畑のようです。ここまで来ますと大半の人は頭痛です。やはり空気は薄く、脈は早く、ダウンジャケットなしでは寒くてだめです。といっても走った後の様に呼吸が増すわけではありません。小屋に着いた途端、元気だった家内が「頭がガンガンする」と言いながら、やっと着替えて頭痛薬を飲みシュラフへもぐってしまいました。全員夕食まで休けいとなります。不思議にも小生は全く頭痛がなく元気です。

夕食前、思わぬことに小雪が舞ってきました。“雪”と聞いて家内も元気になりました。ガスの切れ間に見える5,200mの主峰の壁は800m程の垂直なもので、ここは岩登りの世界です。その右にシャモニーのドリュエー峰にも似た三角錐の岩稜、そのまた右横にモンブランのような雪をまとったレナナ峰(4,950m)が見えます。ここ



写真-1 マッキンダースキャンプ(4,300m)から主峰(5,200m,左)、レナナ峰(4,980m,右手遠方)をのぞむ。手前斜面の植物は *Senecio jons-tonii* (通称 Giant senecio)、(キク科)

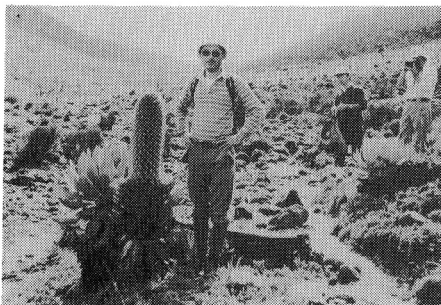


写真-2 4,000 m 地点、後方がマッキンダーズキャンプ。中央人物の左の植物は、*Lobelia deckenii* ssp. *keni-ensis* (キキョウ科、ケニア山の固有種)

キャンプからは 900 m の高度差ですが、北アルプス涸沢からの穂高と全体のかもし出すイメージは似ています。4,500 m あたりから上は新雪でおおわれており、明朝の登りは稜線まではかなりきついです。

夕食は、ステーキ、ポテト、紅茶と豪華版です。ワインもあれば最高でしょうが…。8時には全員寝入りましたが、皆寝返りをうっています。小生は今になって頭痛になり、起きて薬を、とも考えましたが、その元気さえなくなり、

うつらうつらしている内に2時にはガイドに起こされました。(1人は高令夫人の為此こまでの登山です。)頭が割れんばかりの痛さで、紅茶を一杯飲み、頭痛薬をはじめて飲み、2時30分、頂上(レナナ峰)アタック開始です。結果的にはもっと早く、前夜の内に薬を飲んでおくべきでした。懐中電燈を手に小一時間沢添いに進みます。小生はもうすでにバテ気味。いよいよ急な壁の登りにかかります。一步ずつ頭が割れそうな衝撃の内にジグザグのガレ場の登りです。この日は一人のガイドに他の2人が先に登り、もう一人のガイドに家内と小生が続きました。小生は頭痛薬のききめはほとんどなく、フラフラしてきてダウン寸前です。水、カメラ等のサブリュックもガイドに托し、アメ玉をしゃぶりながら10歩登っては2~3分休むという感じ。こののろさに家内がつき合ってくれました。

夜空は快晴で、新月ということもあってか星はあふれんばかり。天の川はくっきり。Milky Way とはよく言えます。流れ星の多いこと。気分が良ければ最高でしょう。私のわかる星座はオリオンのみ。赤道直下ですので南十字星は見えないようです。ガイドはライトなしで登っています。4,500 m 程からはいよいよ雪渓登りです。真夜中のことですのでまだ気温も少し高く、ステップがいい具合にきれえます。いわゆる「小しまり雪」です。赤道直下の雪山はやはり貴重な経験です。今年は雨が多いので頂上付近は雪が多いとか。日本だったらピッケルが必要な程の雪渓登りです。初心者ならアイゼンものです。ガイドはジョギングシューズのような靴で登っています。

下りが心配ですがここで帰るのも一層不安ですので仕方なくフラフラ登ります。「もう私をおいて先に行ってくれ。」という言葉の頭の中で反復しながら。高山病なのはわかっているのですが、どこまで頑張れるのやら、頑張っているのやら自分ではわからないまま5時少し前にやっと尾根に登りつきました。少し風もありますので急に寒くなります。そして20分程雪の稜線を歩くと頂上直下の小屋 Austrian Hut (4,800 m) に到着です。6時20分位の日の出までチョコレートを食べながらここで

時間調整です。ガイドにも差し出すと「ニコッ」と笑って食べます。ここからザイルなしで登れるピークは左手の主峰(5,200 m)ではなく、右手稜線に添って広がるレナナ峰(4,950 m)で、北アルプスの双六岳のようなゆるやかな頂上の形です。ここでは遠近感もうすらいでいるらしく、自分ではあと10分位で登れそうな距離が、ガイドに言わせると登り40分、下り20分の由。

小生はやっと薬が効いてきたのか小屋で休んでいるうちに意外にもすっかり元気になってきましたが、逆に今まで元気だった家内が

チョコレートも食べられない程に苦しそうです。他の2人は元気で、小生もかなりの未練はありましたが「戻る勇気」と思い、私共はこの小屋で待つこととし、他の2人とガイド一人で登頂です。Good Luck. /

唯、少し休み過ぎて登頂は御来光に間に合わずだったのですが、一方すっかり元気になった小生は、小屋から3方向に広がる尾根に行き、雲海の中、御来光の写真を撮ることができました。刻々と変化する岩稜の朝焼けはオレンジ色で、日本アルプスでは全く経験できない色ですし、太陽の赤さ、大きさなど、出来上ったスライド写真ではかなりイメージが違います。やはり自分の脳裡にやきつけるだけです。カメラを持つ手、雪を踏みしめる両足が少し震えるような感動です。意外に寒さは感じません。もうこの景色に夢中だったのでしょう。家内が休んでいる小屋の屋根は霜で真白です。段々と日が昇り、少し鞍部にあるこの小屋もまもなくオレンジ色に変わり、オレンジシャーベットのかたまりの様です。無心にシャッターを押し続けます。その“カシャン”という音だけの世界です。前方の頂上直下には、アタック隊の黒い3つの点が動いているのがわかります。

アタック隊の帰りを待たずして、朝食の準備もあり、我々はガイドと下り始めました。心配していた下りは、もう明るくなっている事と、頭もスッキリした事、気温の上昇もありそれ程むずかしくありません。かかとを踏んでステップを確認しながら、まさに穂高岳白出しの科尔から涸沢ヒュッテ目指しての下りです。ピッケルがあればグリセードの斜面です。目の谷をはさんだ別の尾根の鞍部には、大きな湖が静かに朝日を待ってたたずんでいます。3時間で登った所を30分程で下ります。途中、ガレ場は5 cm 程の霜柱だらけです。その霜柱をケチらしながらマッキンダーズキャンプに8時少し前に到着。頂上アタック隊もすごい勢いで下山して来ました。

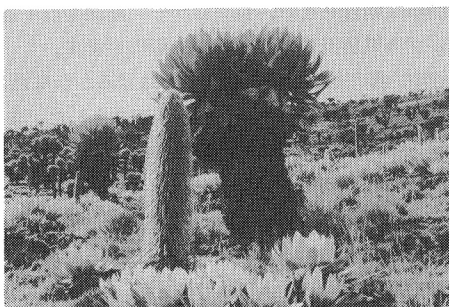


写真-3 3,800~4,000 m 地点。中央右手の幹(?)上に葉のついた植物は *Senecio jonstonii* (キク科), その左の弾丸型の植物は *Lobelia telekii* (キキョウ科), 手前の下の低い植物は *Senecio keniensis* ssp. *brassica* (キク科, ケニア山固有)

簡単な朝食をとり、長いながーい湿地帯の下りのはじまりです。キャンプ周辺は北アルプス黒部五郎のカールにも似ています。

途中、振り返りますとレナナ峰ははるかかなたに朝日をあびて真白に輝いています。又この谷間にも日光が差し込んできました。まだガスは発生しておらず、10時迄は快晴という予定です。Met Station で遅い昼食をとり、ここからゲートまでの林道歩きは、もう惰性で足が前に出るというもの。幸いにも3日間、雨らしき雨にもあわず、予定よりも早く3時前に公園ゲートに到着。この日は12時間近く歩いたこととなります。迎えのジープのありがたく思えたこと。

ガイドには200 ksh (1,400円)、ポーターには50 ksh (350円) のチップを渡し、一路ナロ・モルロッグへ。ビールで乾杯です。ケニアのビールがこれ程にうまいとは、小休憩のあと一路ナイロビへ。疲れ切った体での帰路の運転は本当に御苦労さまでした。7時30分、ナイロビ着でした。

頂上アタック隊の一人、N氏はナイロビ(1,660m)滞在1年2か月で、登山経験豊富なガッチリした体格、環境庁からの出向で重い登山靴にもなかなか年季が入っています。最後までビデオを撮り続けてくれた彼は、最後の下りの林道で靴に石ころが入ったのに気づかず歩いている内に、とうとう足の裏の豆がつぶれてベロツと真赤。「頂上真近もこうだった」と事務所の階段を四つんばいのように登っていました。

一方、O氏はナイロビ滞在10か月で登山経験はゼロ。フランスで買い求めたという軽登山靴もおろしたでのヒョロツと背高。後で聞くところによると、彼は常に頭痛持ちで「高山病なのやら、普段の頭痛なのやらわからないうちに頂上だった。」という幸運者。本人は「若さ、！」を強調。

さて、我々はナイロビ滞在6か月。登山経験はウン年。3,000mの北アルプスを庭のようにしていた家内。2人でカナダロッキー登山と3,800mでのスキー経験も重ね、かつまたアタック寸前にはスイスアルプスの3,500mで足慣らしをするという慎重さ。されど頂上踏めず。

だから山登りは止められません。